

第 46 回関西スペイン語教授法ワークショップ 2011 年 2 月 6 日(日)開催

発表要旨： 「テスト作成と実施について ―学生による小テスト作成の試みから―」

外国語教育において教師が学習者を評価する際、ひとつの基準となっているのがテストである。一口に「テスト」といってもさまざまで、実施の方法（筆記、口頭かなど）、文法に関する知識を問うものか、会話や作文などを通して運用力を評価するものかといった評価対象（文法的知識、運用能力など）、テスト形式（作文、空欄補充など）に加え、小テスト、定期テストといった試験範囲や評価において占める割合の異なるテストの種類など、「何をどのように評価するのか」という目的に応じたテストが作成・実施されている。

テスト作成やテストによる評価に関する研究（尾崎茂(2008)『言語テスト学入門』大学教育出版、三浦省五(監修)(2008)『英語教師のための教育データ分析』大修館書店など）では、テストの作成・実施について「妥当性」、「信頼性」、「実用性」、「波及効果」を意識することの重要性が指摘されている。「妥当性」とは、テストが測ろうとしていることをきちんと測ることができるようになっているか、ということであり、妥当性の高いテストを作成するには、①何を目的にしているのか、②どのような評価を行いたいのか、③テスト項目が学習内容から外れていないか という三点を検討する必要がある。「信頼性」とは同じぐらいの学力レベルの人が同じテストを受ければほぼ同じ点数が取れるようなテストになっているかどうか、ということであり、信頼性の高いテストの作成のためには、事前に作成したテスト細目に基づいてパイロットテストを作成・実施することや、信頼性係数という指標を計算すること、また採点の訓練を受けた複数の採点者による採点を行うことなど、専門的な知識を必要とし、時間と労力のかかる過程が本来は必要である、とされている。学習者を正しく評価するためには「妥当性」と「信頼性」の高いテストを作成することが不可欠であるが、授業の実施と平行してこれら二つをかなえるテストを作成することがどこまで可能であるか、ということが「実用性」である。時間、予算、設備、人の四項目が「妥当性」と「信頼性」の高いテストの作成・実施を左右する。四点目の「波及効果」とはテストの持つ影響力のことであるが、ここまで簡潔に説明してきた三点と異なるのは、教師だけでなく、学生にも大きくかかわりのある項目である、というところである。作成・実施するテストのあり方によって教材や授業方法などに変化が生じ、テストで好成績をおさめようと努力する学生にも直接的、間接的に影響が及ぶ。

学習者にとってテストはいろいろな意味を持つであろうが、自己の到達度の確認を行い、間違いを修正したり不足を補ったりするためのツールとしてテストは役立つと言えるので、これを意識してテストの勉強に取り組むことは外国語の修得を目指す学習者にとって良い方法であるだろう。しかし、大学における外国語教育では、何らかの資格取得のためにテストで良い成績を取りたい、単位が必要なのでテストで落第点を取れない、といった現実的な目標を持つ学生も少なからず存在する。とはいえ、大学生がある外国語科目を履修し

で勉強をする目的が何であっても、彼らがテストのために勉強をするということはゆるぎない現実であるので、教師はテストの内容や質に責任を持たねばならない。作成する小テストや定期テストは、教科書の内容や授業中に行った活動に基づくことが多いので、学習項目に関しても検討が必要である。

テストを受験する学習者の立場に立つと、テスト受験までにはまんべんなく(試験範囲を)勉強をするということに加え、何が(テストに出そうな)大事なことなのかを考えるという過程を経るのではないだろうか。テストを作成・実施する教師の立場からも「大事なことは何か」をぜひとも考えて欲しい、との考えから、ある決まった範囲の小テスト(20点満点)を作成し、自分で解答するという課題を必修選択外国語としてスペイン語を履修している1年生35名と2年生34名に対して出した。作成に際しては「学習者のその後の学習に役立つ小テストになるように考えて作成する」ことを課した。提出された小テストを分析すると、配点が20点満点であることから、ほとんどの学生が3問もしくは4問の設問数とし、問題形式は西訳と和訳を取り入れている学生が9割以上を占めた。

小テスト作成とその解答とは別に、いくつかの項目に関して「小テスト作成レポート」を書かせた。その中の項目のひとつであった「その後の学習に役立つ小テスト」であるための工夫に関して、後で見直しをすることを前提に「教科書中心で見やすく作った」「まとめプリントになるようにした」「基本例文を並べた」という回答や、弱点の確認をするために「まんべんなく出題した」「形式を多様化した」「設問で難易度を変えた」が目立つ回答であった。また、授業実施形態が週2回の授業のうち、1回がスペイン語ネイティブ教員による口頭練習がメインの授業であることをふまえて、その授業に役立つことも考えて「会話形式の問題を作成した」「日常表現を多く出題した」との回答もあった。また、「基本をしっかり勉強すれば高得点が取れることを重視」して教科書中心の内容の小テストを作成した学生が多かったが、なかには応用問題を多く取り入れて到達度を測定することを目的にしたり、出題範囲以外の前課までの問題を含めて既習内容の定着の確認をしたいと述べた学生も複数見られた。

小テストを作成した感想として、「テストを作る目線で勉強することで理解が深まった」「何をテストに出したいかを考えてみて大事なところが分かった」「いい勉強方法だと思った」との意見が多く寄せられたので、今回の課題の目的はおおむね達成できたと考えられる。また、「パソコンでスペイン語が打てるようになってよかった」「配点を考えたり、分かりやすい設問の文を考えたりすることが良い勉強になった」という意見からは、今回の課題にはスペイン語学習以外にも学生の学びに役立つ要素が含まれていたことがうかがえる。

今回は、作成ののち自分で解答してどのような小テストになっているか確認することも課題のうちに含めていたが、ワークショップの参加者から「自分で解答することをあらかじめ知らせずに、後日、自分で解答させるという方法もあるのではないか」とのコメントが寄せられた。この方法を用いれば、小テスト範囲の理解度についても測ることができるので、今後実践してみたいと思う。

(村上 陽子)